



而後發白集

^ 5  
2853





門  
卷  
2.853

玉泉山人



序

古德曰人愛其多者所好亦多  
德好以度日而終者但清濁  
不同耳。至清則或好山水  
或好吟咏又進之又進之。身  
好至於清其心而世出世間之  
好最遠矣。今視而後愛之此



人是



著。此皆之清致。向之澹白。有  
如淨理。迎古波之好。吹拂之善。  
多意于此。款。因。杯。新。悟。以。心。  
歲在癸丑秋九月

前任大森恭小禪題



而石級白集卷之三

春

卷之三

元日此位ささるるふささるるささるる部

ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる

ふ妙の音をささるるる部

信眼と此あふる

めささるるささるるささるるささるる部







小窓より煙を巻く

心しる月を木の芽ふ梅香し

明る梅よ今やさる月やうめれども

尾山月の影よ梅を

山里や梅の葉肉れさし扇

肉をさくく起るよふし梅の花

梅やつほみさほをそめり丸

と

葉をこれ端ひらりとめし梅枝を致

うらむをさかきぬ口のうらち

さかきかきさくは梅の臭

うらむをさかきぬ口のうらち

うらむをさかきぬ口のうらち

黄きや埃吹かほははら梅

柳

うらむをさかきぬ口のうらち



あゝあゝのよ 渡りてきてみる 柳の  
坂のりる びたよ ちかたし ちかたし  
控もせぬ ち 仕切もある 柳のあ

二のよ 色 舞のし いたる ちかたし  
李 嶺とてきよ ち 柳の 杖をひききり  
月をひききり ち 柳の 杖をひききり  
砂山 半里 何より ち ち 柳の 杖をひききり

あゝあゝのよ 渡りてきてみる 柳の  
坂のりる びたよ ちかたし ちかたし  
控もせぬ ち 仕切もある 柳のあ  
泡をひききり 田よある ちかたし ちかたし  
あゝあゝのよ 渡りてきてみる 柳の  
坂のりる びたよ ちかたし ちかたし  
控もせぬ ち 仕切もある 柳のあ

あゝあゝのよ 渡りてきてみる 柳の



静かなるをたふしのけしきけしきの  
海に人のきこゆるをたふしのけしき  
静かなるをたふしのけしきけしきの  
かきつらうのけしきけしきのけしき  
かきつらうのけしきけしきのけしき  
かきつらうのけしきけしきのけしき  
かきつらうのけしきけしきのけしき

高矢著

静かなるをたふしのけしきけしきの  
海に人のきこゆるをたふしのけしき  
静かなるをたふしのけしきけしきの  
かきつらうのけしきけしきのけしき  
かきつらうのけしきけしきのけしき  
かきつらうのけしきけしきのけしき  
かきつらうのけしきけしきのけしき

高矢著







菴子

言りしを菴子なりききし

しき

ほろろやみきしほろろ細めを

大粒れあつた乃つそめりれ

菴

鳴りや揚るれけりれ晴る

里崎よきし菴子

村とせそ又る海や啼き菴

菴子

雪風やきし啼きよを乃け

物なり菴のよそをたる寺の庭

花

ゆきあめをくとあけを花の上

日まわきを啼きつる山 櫻

みゆのよそをみたるも一色いれ



一 関の扉より水もたよる

一 接つてある茶もよはつたかな

赤山

名はよ進出さるゝ茶えゝ程

嵐山

茶のおもてしきくこかけり

水遣

茶の心もよれまゝをきつゝ

今も昔も茶の心もよれまゝをきつゝ

茶の心

さくらんぼの心もよれまゝをきつゝ

さくらんぼの心もよれまゝをきつゝ

さくらんぼの心もよれまゝをきつゝ

さくらんぼ

さくらんぼの心もよれまゝをきつゝ

さくらんぼ



春下降 雪も 氷も 春の 雪も 春の 雪も

梅の花 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も 春の 雪も 春の 雪も

春の 雪も



春日路

春日路の端記日永 神の麓

春日路の端記日永 神の麓

陸

片町や石屋の門乃はら 陸

春日

山中 匠の末吉

切さるや一間くの宵ねす

雑春

うほほほほほのまゆりや 西日歌

よほほほほほのまゆり

まゆりつとまゆり月乃のり







卯のあやうに新うきをまゆ

あやうに新うきをまゆ

あやうに新うきをまゆ

池ふらふらとまゆ

うきをまゆ

あやうに新うきをまゆ

二のうきをまゆ

あやうに新うきをまゆ

今やまゆきをまゆ

あやうに新うきをまゆ

あやうに新うきをまゆ

あやうに新うきをまゆ

あやうに新うきをまゆ

あやうに新うきをまゆ

あやうに新うきをまゆ

謹佛



日枝の唐の乃多つてくか引ま

詣る 裾のよきあうく

あうりあうり せうりあうりあうり 佛 とき

節のあうりあうり せうりあうりあうり せうりあうり

杜多

辻堂をめぐりあうりあうりあうりあうりあうり

増年

序「つるさうりあうりあうりあうりあうりあうり

てさうりあうりあうりあうりあうりあうり

牡丹

地 形つ九町をめぐり 牡丹のあうり

芥子

斗 さいふ 塙さうりあうりあうりあうりあうり

あうりあうりあうりあうりあうりあうりあうり

末のあうり

末のあうりあうりあうりあうりあうりあうり











くろ 鶯

生福とくまきさ出心や水鏡争

一田 蛙

晴くまきさ男うしろ舞や枝蛙

鶯

きまきさかきわさるあやや鶯のき

なげきさみね探とくまきさく山女

鶯

起つ福と笑の通る 鶯のうや

鶯のうや

始ま 鶯のうや 鶯のうや

鶯のうや

探る百けらりとまや 鶯のうや

面籠くまや 鶯のうや 鶯のうや

鶯のうや

鶯のうや 鶯のうや 鶯のうや



夕暮

ゆききりたあまのあしを掛る

夕暮のあまのあしを掛る一田面

あまのあしを掛る

村のあしを掛るのあまのあしを掛る

あまのあし

あまのあしを掛るあまのあしを掛る

あまのあしを掛るあまのあしを掛る

あまのあしを掛るあまのあしを掛る

あまのあし

あまのあしを掛るあまのあしを掛る

あまのあしを掛るあまのあしを掛る

あまのあしを掛るあまのあしを掛る

あまのあしを掛るあまのあしを掛る

あまのあしを掛るあまのあしを掛る

あまのあしを掛るあまのあしを掛る







而右發白集卷之三

扶

初終

之川あき中 橋を 葎乃 進歩 印

ハ 水口 驛子て

初終也 省屋比 象北 川 源三

星夕

枝刈 是 是 与 嶮 中 星 社 あり

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '山' and '水'.*







あさかほりや、ふつと、あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼

あまき

あまき、涼

あまき、涼

あまき、涼











新酒

酒を飲むにやうやくよき一斗の月

入

酒の舟又押出しく十六枚

之結

酒を知るはつらう月を欠きせむ

新酒の産るる人境

右明や岩弁もと北原産

ふつと酒をあふぬ酒や丘の月

新酒

酒の縁にけり酒はさよなりく

今と酒はあ

酒の味の引くもあはる新酒は

新

酒の味はく酒の味はく新酒の味

酒の味はく酒の味はく新酒の味







松陰

松陰中 海軍の志士 又 ありて水

松陰

松陰の志士 ありて水

松陰

松陰の志士 ありて水

松陰の志士 ありて水

松陰の志士 ありて水

松陰

松陰の志士 ありて水

松陰

松陰の志士 ありて水

松陰

松陰の志士 ありて水

松陰の志士 ありて水



稀よりり鳥らひさるるまじり部  
まゆのほろほろのひかりのしるしをくわ

言推

はるくと静さるるまじりまじり

梅尾

ふかきりしるしをくわりよみまじり

まゆのほろほろ

まじりまじり人よみまじり

麻

まじりまじり

まじりまじりまじり

まじり

まじりまじりまじり

まじりまじり

まじりまじり

まじりまじり



杉山也 枯 終 へ づ へ ぬ ぬ の い せ  
松 清 へ 松 山 と づ へ ぬ ぬ 乃 好  
河 原 へ づ へ ぬ ぬ の 味 あり 枯 菊 子  
老 へ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
接 り 中 へ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

杉山也 枯 終 へ づ へ ぬ ぬ の い せ  
松 清 へ 松 山 と づ へ ぬ ぬ 乃 好



多分 2000 年頃

多分 2000 年頃

多分 2000 年頃

多分 2000 年頃

多分 2000 年頃

多分 2000 年頃

多分 2000 年頃

多分 2000 年頃

多分 2000 年頃

多分 2000 年頃



きりぎりすの聲もりの里うら

ら

あかきや海をみえを波を

うら

あかきや海をみえを波を

うら

あかきや海をみえを波を

うら

あかきや海をみえを波を

うら

あかきや海をみえを波を

うら

あかきや海をみえを波を

うら

あかきや海をみえを波を

うら



大根羹

此より作り候し 薑もやし大根引

折し 薑もやし 煮く 大根もやし

煮し 煮し 大根もやし 煮し 煮し

冬煮

薑もやし 大根もやし 煮し 煮し

大根

大根もやし 煮し 煮し 煮し 煮し

ほうとうと大根の羹もやし 煮し 煮し  
薑もやし 煮し 煮し 煮し 煮し

埋火

うつけい 煮し 煮し 煮し 煮し  
煮し 煮し 煮し 煮し 煮し 煮し

措

煮し 煮し 煮し 煮し 煮し 煮し  
煮し 煮し 煮し 煮し 煮し 煮し



さ

ほろろと花のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき

遊懐

おとろくも花のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき  
さきさきと春のさきさきと春のさき

遊懐



Handwritten cursive text, top line on the right page.

Handwritten cursive text, second line on the right page.

Handwritten cursive text, third line on the right page.

Handwritten cursive text, fourth line on the right page.

Handwritten cursive text, fifth line on the right page.

Handwritten cursive text, sixth line on the right page.

Handwritten cursive text, seventh line on the right page.

Handwritten cursive text, eighth line on the right page.

Handwritten cursive text, top line on the left page.

Handwritten characters, second line on the left page.

Handwritten cursive text, third line on the left page.

Handwritten characters, fourth line on the left page.

Handwritten cursive text, fifth line on the left page.

Handwritten cursive text, sixth line on the left page.

Handwritten characters, seventh line on the left page.

Handwritten cursive text, eighth line on the left page.



鴨子挿一の教をうむるを天比岩戸山

餅持お

中編とやうにうらなひ深しと録の書

中編の録もてあると録もあつた何れ

年一志

深遠しよき連やみらへん

年一志

ひまはるや坊主挿一と年一志

年一志

ひまはるや坊主挿一の書

ひまはるや坊主挿一の書

年一志

ひまはるや坊主挿一の書

ひまはるや坊主挿一の書

ひまはるや坊主挿一の書

ひまはるや坊主挿一の書



おのゝちのこころをいふまじき  
かたじけなくも

巻中一過地

情なきやうな心持をいふ  
風をいふ

あつちのこころをいふまじき  
かたじけなくも



し

し

新  
志所  
堂

嘉永六年癸丑九月

名古屋益屋町

伊藤氏蔵板

蕉門尾州名古屋  
俳諧本町四丁目  
摺物書林晴月堂



高松蒙句集



尾張

雲仙社  
一清  
子孫





